

山梨県北巨摩郡高根町

持井遺跡

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1992

高根町教育委員会

峡北土地改良事務所

山梨県北巨摩郡高根町

持 井 遺 跡

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1992

高根町教育委員会
峡北土地改良事務所

序 文

本書は、平成元年度県営圃場整備事業に伴い発掘調査された持井遺跡の調査報告書であります。

高根町は、原始・古代より八ヶ岳南麓の雄大な自然に育まれ、人々の生活の跡を物語る埋蔵文化財が数多く分布しています。縄文時代の青木遺跡・石堂遺跡、平安時代の湯沢遺跡・青木北遺跡・東久保遺跡等に代表される大規模集落跡が、かつての発掘調査で明らかにされました。

このような中で、今回調査が行なわれた持井遺跡は、縄文時代中期の住居址や、中世の火葬墓などの新たな発見もあり、多大な成果を上げることが出来ました。

遺跡は先人が私達に遺した足跡で在り文化遺産で在ります。その中には先人の知恵や技術が数多く刻まれています。これらを歴史の一頁で済ませてしまうのではなく、一つ一つ解き明かし後世に伝えることが私達の責務と考え、遺跡調査の必要性を御理解いただくと同時に、本報告書が今後の調査研究の一助となれば幸いです。

最後に、今回の調査及び報告書作成に御協力、御指導賜わった関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成5年3月

高根町教育委員会

教育長 中嶋 靖

例　　言

1. 本報告書は、平成元年度県営圃場整備に伴う、持井遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、県北土地改良事務所との負担協定及び、文化庁・山梨県より補助金を受けて、高根町教育委員会が実施した。
3. 本書は図面作成・執筆・編集を権本が、写真撮影を雨宮が担当した。
4. 遺構図の実測は、株式会社コンピュータシステムの遺跡調査システムを使用した。
5. 発掘調査及び本書の作成にあたり、下記の方々より御指導・御助言頂いた。記して謝意を表します。(敬称略)
新津健、保坂康夫、八巻与志夫、米田明訓、山路恭之助、深沢祐三、山梨県文化課、山梨県埋蔵文化財センター、県北土地改良事務所
6. 発掘調査による出土遺物・記録図面・写真等は、高根町教育委員会に保管してある。
7. 発掘調査組織

調査主体……………高根町教育委員会
調査担当……………雨宮正樹
調査員……………権本 勝
事務局……………中嶋 靖、横松伸治、原 一元、島 正樹

8. 調査参加者

赤岡里子、浅川浅江、浅川今朝美、浅川花子、浅川春枝、浅川みえ子、横松啓子、横松小菊、横松幸子、横松種三、川端下圭子、坂本明子、白倉カツ子、原藤まさみ、中嶋英子、仲嶋まゆみ、三澤ふみ江、吉沢とよ子

凡　　例

1. 挿図中で略号の S B は住居址を、 S K は土壙を、 S D は溝をそれぞれ示す。
2. 遺構図面のエレベーション・セクション図において、水平線横の数字は海拔高度 (m) を示している。
3. 1 号住居址実測図面上で柱穴横の数字は、柱穴番号を示す。
4. 1 分住居址実測図と向炉実測図のセクション図面における土層説明は共通であり、同じく 1 号堆疊と 2 号堆疊も共通である。
5. 土器実測図面で断面図におけるスクリーントーンは、陶・磁器であることを示している。

目 次

序 文

例 言・凡 例

第Ⅰ章 調査状況 1

I 調査に至る経緯と経過 1

II 遺跡の立地と環境 1

III 周辺の遺跡 1

IV 調査区域の設定と調査方法 5

第Ⅱ章 遺構と遺物 5

I 概 要 5

II 住居址 1号住居址遺構 8

 遺物 8

III 墓壙 1号墓壙遺構 10

 遺物 10

 2号墓壙遺構 11

 遺物 11

IV 土壙 1号土壙遺構 11

 遺物 13

 2号土壙遺構 13

 3号土壙遺構 13

 4号土壙遺構 14

 遺物 14

 5号土壙遺構 14

 6号土壙遺構 14

 7号土壙遺構 14

 8号土壙遺構 14

 9号土壙遺構 14

 10号土壙遺構 15

 遺物 15

 11号土壙遺構 15

 遺物 16

V 滝 1号溝遺構 16

 遺物 17

VI 遺構外出土遺物 上器	18
石器	18
その他	20
第三章 総 括	20
I 縄文時代	20
II 中 世	20
III 結 び	21
引用・参考文献	21

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	2
第2図 遺跡周辺地形図	3
第3図 持井遺跡全体測量図	6
第4図 1号住居址実測図	7
第5図 1号住居址炉実測図	8
第6図 1号住居址出土石器実測図	8
第7図 1号住居址出土上器・石器実測図	9
第8図 1号埋甕実測図	10
第9図 1号埋甕土器実測図	10
第10図 2号埋甕実測図	10
第11図 2号埋甕上器実測図	11
第12図 2号埋甕内出土石器実測図	11
第13図 1～7号上塙実測図	12
第14図 8～11号下塙実測図	13
第15図 1号上塙出土石器実測図	13
第16図 4号下塙出土遺物実測図	14
第17図 10号土壤出土土器・石器実測図	15
第18図 11号土壤出土古銭拓影	15
第19図 1号溝実測図	16
第20図 1号溝出土遺物実測図	17
第21図 1号溝出土上器実測図	17
第22図 1号溝出土石匙・石器実測図	18

第23図 遺構外出土上器実測図	19
第24図 遺構外出土石器実測図	19
第25図 遺構外出土石匙・古銭	20

表 目 次

第1表 1号住居址柱穴深さ表	7
----------------	---

図 版 目 次

図版1 遺跡全景（南東より）	図版8 11号土壤
遺跡全景（北東より）	1号住居址出土土器
遺跡全景（東より）	1号住居址出土土器
図版2 1号住居址	図版9 1号住居址出土石匙
1号住居址炉	1号埋甕土器
1号埋甕	2号埋甕土器
図版3 2号埋甕	図版10 打製・磨製石斧
1号溝（西より）	磨石・凹石
1号溝（東より）	1号溝出土土器
図版4 1号土壤	図版11 1号溝出土石匙・石鍔
2号土壤	1号土壤出土石匙
3号土壤	4号土壤出土土器
図版5 4号土壤土器出土状況	図版12 10号土壤出土土器
4号土壤	11号土壤出土古銭
5号土壤	遺構外出土土器
図版6 6号土壤	図版13 遺構外出土石匙・古銭
7号土壤	遺構外出土石匙
8号土壤	遺構外出土石臼
図版7 9号土壤	
10号土壤	
11号土壤配石状況	

第Ⅰ章 調査状況

I 調査に至る経緯と経過

平成元年度における県営園場整備事業の実施計画により、高根町教育委員会に町振興課園場整備係より、該当地内の埋蔵文化財の有無について調査依頼を受けたため、事業予定地内を昭和63年に試掘調査を行った。水田一枚につき1~2ヶ所に2×3mの試掘坑を任意に設定し調査した結果、丁区の北東部において土壤と思われる遺構や縄文時代の土器片が見つかった。更に遺跡の広がりの確認を進め、尾根斜面のローム層が地山となる約1,000m²の範囲で遺構・遺物が検出される可能性があると認められた。

そこで県北土地改良事務所・県文化課・町教育委員会で協議を行なった結果、村山北割西工区の当地を記録保存を前提とした発掘調査をすることとなり遺跡名は小字より持井遺跡と命名して、平成元年9月1日から同年10月9日まで発掘調査を行なった。

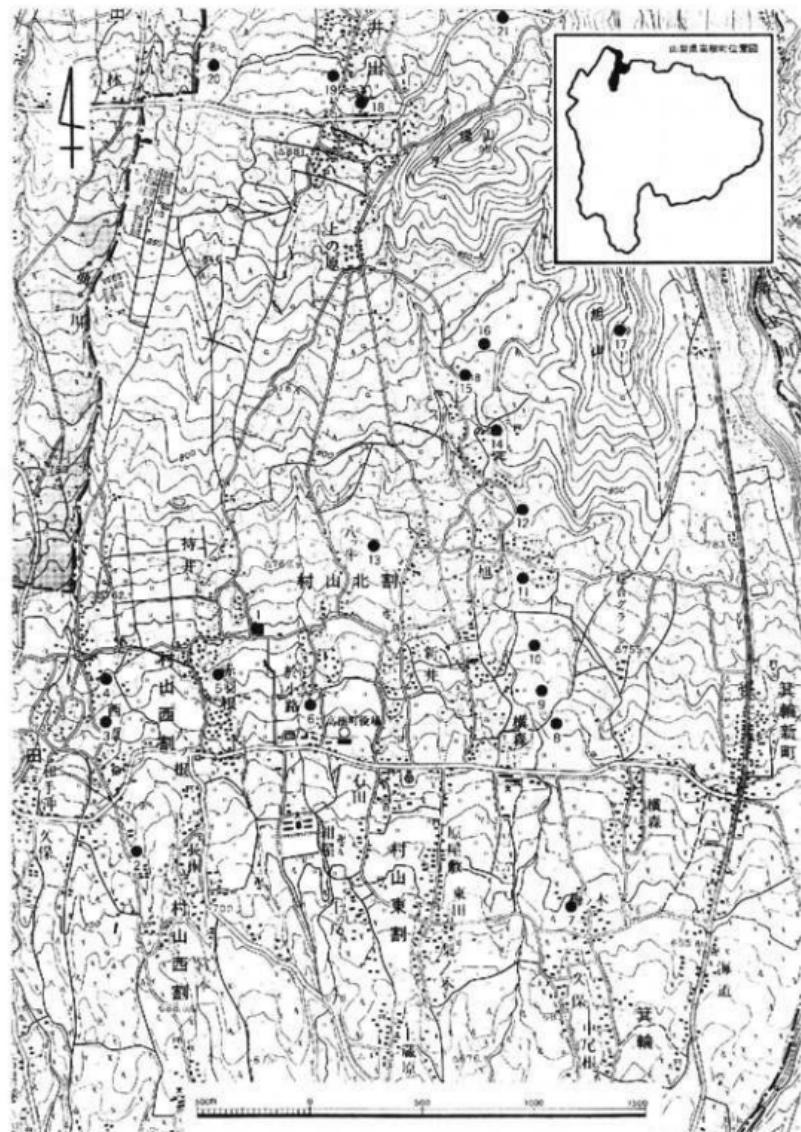
II 遺跡の立地と環境

八ヶ岳南麓の広大な裾野の東部に位置する高根町は、自然に恵まれ東に八ヶ岳の主峰赤岳を源流とする川俣川と大門川が流れ、久保長沢地内で合流し須玉川となりさらに南流する。又、川俣川の分流である西川や八ヶ岳斜面上に源流をもつ中沢川、小深沢川、甲川等の小河川が流れ、これらの大小河川により開拓された尾根が南北に細長く延びている。

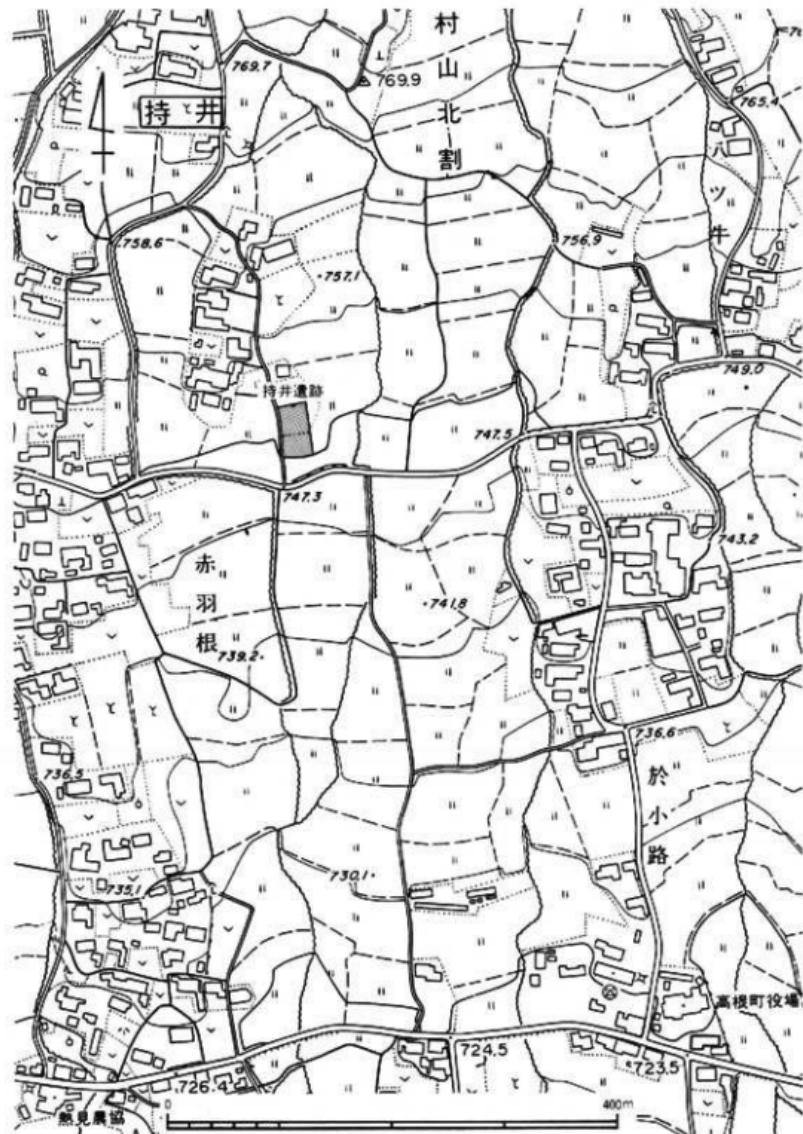
持井遺跡は、山梨県北巨摩郡高根町村山北割字持井地内(3817・3857・3858・3859)に所在し、標高は約750mを測り、赤岳火山泥流等の火山噴出物上にローム層が堆積した尾根の東端に存在する。地形は緩やかに南傾し遺跡の南・東側は傾斜を増し火山泥流による礫層へと落込み、現在水田となっている。北・西側は住宅や畑となり、畑からは土器片が表面採取され持井遺跡とのつながりや、新たな遺跡の存在が予見される。

III 周辺の遺跡

『山梨県遺跡地名表』、『山梨県の中世城館跡』、『町内遺跡分布調査』等の報告による町内の遺跡総数は170ヶ所余りに上る。これを時代別(一遺跡で時代重複あり)に見ると、先上器時代6、縄文時代106、弥生時代13、古墳時代(古墳墓を含む)21、平安時代64、中世～近世80遺跡となる。



第1図 遺跡位置図(1/25000)



第2図 遺跡周辺地形図 (1/5000)

先土器時代の遺跡は、丘の公園遺跡群の様に標高1200mを越える生活環境の厳しい高冷地や下沼沢の湖沼遺跡で遺物が検出されている。狩猟を主とした当時の人々にとって八ヶ岳の周辺は比較的暮らしやすい環境だったのだろう。

縄文時代の遺跡を時期別に見ると早期7、前期7、中期62、後期20、晩期5遺跡となる。高地から次第に南下し大きな集落が形成され、特に中期には遺跡の数を増しその痕跡は台地、尾根、微高地など広域に見られる。野添（中期）、青木（後期）、石堂B（後～晩期）等の集落跡をはじめとして多くの遺跡が発掘調査され、縄文時代の様相が次第に明らかになってきている。

弥生時代になると稻作等との関係から生活圏は県道長坂高根線より南の標高750m以下の地域に限られ、尚且つまばらにしか見られない。この事は当時の稻作技術が高地の気候風土に適していなかったと言える。

続く古墳時代の遺跡も少なく、西の原遺跡で住居址1軒が確認されている他、小池地区土取り場遺跡で土器が出土している。古墳墓は昭和39年刊行の『山梨県遺跡地名表』によると11基と在るが、近年の開発による消滅や占拠として不確実な部分も多く再調査が必要である。

奈良時代の遺跡は現在のところ町内では確認されていないが、これは八ヶ岳南麓全般に見られる傾向で、権力は地方から中央集権へと移行し、国の律令政策の中で生産性の高い塩川流域へと生活の場が集約されて行ったのであろう。

平安時代になると遺跡の数は激増する。八ヶ岳南麓は巨摩郡速見郷と推定され、御牧の一つ柏前牧が置かれていたとも言われる。国家や在地有力者による計画的な開発、入植が行なわれ人口は急増した。それらを証明する様に、湯沢遺跡からは住居址や掘立柱建物群の南側に柵列を配した官衙施設を想定させる遺構群が発見され、東久保遺跡では鍛冶を中心とし生活を営んだ集落址が調査されている。又、南に続く青木北遺跡遺跡からは壁直下に柱の礎石を配した特殊な堅穴住居址が確認されている。

以後、時代は中世から近世へと移り変わってゆくが、引き続き人々の暮らしの痕跡は町内の各所で見られる。

第1図に持井遺跡周辺の発掘調査された遺跡を図示した。

1. 持井遺跡 縄文時代前期・中期、中世 (調査年度1989)
2. 西の原遺跡 縄文時代中期、古墳時代前期 (1985)
3. 西原遺跡 縄文時代中期、平安時代、近世 (1987)
4. 西原北遺跡 平安時代、近世 (1988)
5. 藤林寺遺跡 平安時代、中世 (1988)
6. 当町遺跡 縄文時代中期、中世、近世 (1987)
7. 梅ノ木遺跡 縄文時代中期 (1982)
8. 青木遺跡 縄文時代中期・後期 (1981)

9. 青木北遺跡 平安時代 (1982)
10. 東久保遺跡 繩文時代中期、平安時代 (1983)
11. 旭東久保A遺跡 繩文時代中期、中世 (1984)
12. 旭東久保B遺跡 繩文時代前期・中期、平安時代 (1984)
13. ハツ牛遺跡 平安時代 (1989)
14. 上ノ原遺跡 繩文時代中期 (1983)
15. 妻の神遺跡 繩文時代後期、近世 (1988)
16. 妻ノ神遺跡 平安時代・近世 (1988)
17. 旭山塚址 中世
18. 野添遺跡 繩文時代中期・後期 (1983~85)
19. 石堂A遺跡 平安時代 (1985)
20. 石堂B遺跡 繩文時代中期・後期・晚期 (1985~86)
21. 素師堂遺跡 繩文時代早期・平安時代 (1989)

IV 調査区域の設定と調査方法

試掘調査結果と岐北土地改良事務所より呈示された切り盛り図により調査面積を約1000m²とし、現地割に従い北西角を基点として8×8mのグリッドを設定した。グリッド番号は、西から東へアルファベットのA～Eを、北から南へ数字の1～7をそれぞれ当て、A1・B1…グリッドと示した。

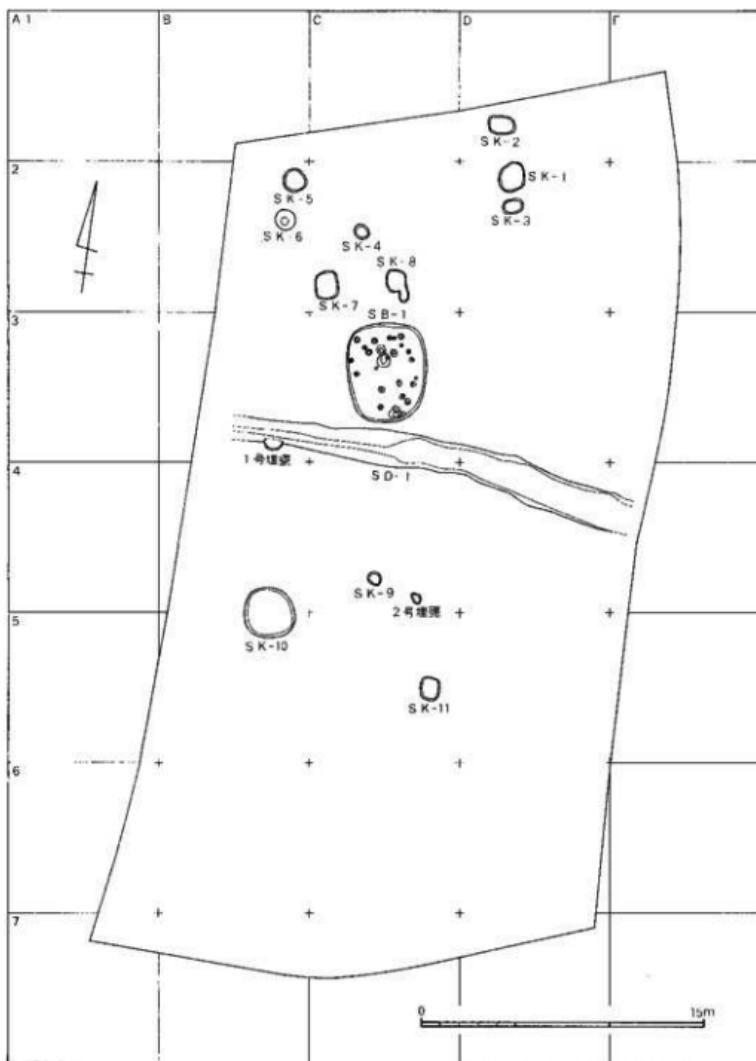
調査の方法は、先ず重機で表土及び水田造成時の埋土を除去し、以下を人力により少しづつ掘り下げた。遺構確認後はセクションベルトを残し必要に応じて微細図をとりながら遺構内を精査した。

第二章 遺構と遺物

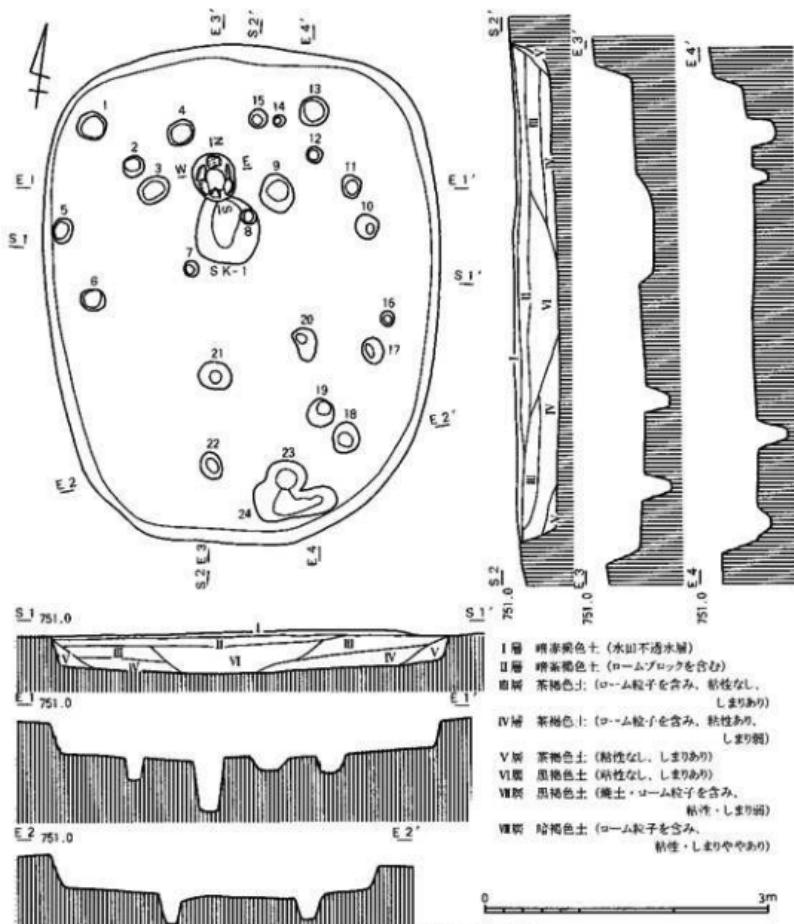
I 概要

調査の結果検出された遺構は、繩文時代中期の住居址1軒と埋甕2基、土壙11基（中世の土壙墓1、時期不明10）、時期不明の溝址1条である。

遺物は水田造成時の削平が遺構面に及んでいるため少ないが、繩文土器、石器（打製石斧、磨製石斧、磨石、石匙、石鏃）、陶磁器、土師質土器、古錢、石臼が出上した。



第3図 捜井遺跡全体測量図 (1/300)



第4図 1号住居址実測図 (1/60)

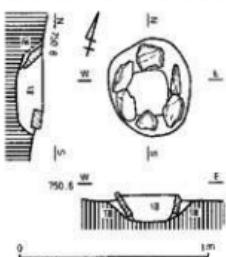
番号	深さ cm						
1	8.0	7	23.7	13	24.3	19	30.0
2	16.4	8	15.4	14	21.6	20	25.1
3	15.1	9	54.8	15	23.9	21	23.6
4	3.5	10	22.8	16	6.0	22	24.1
5	22.5	11	23.4	17	28.3	23	18.2
6	5.2	12	15.1	18	22.8	24	14.6

第1表 1号住居址柱穴深さ

II 住居址

1号住居址

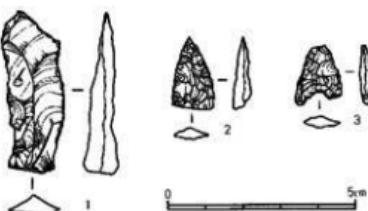
遺構 (第4・5図) C3グリッドに位置する。長軸5.3m、短軸4.2mの楕円形を呈し主軸方向はN-8°-Wを指す。炉は住居の中心より北壁寄りに設けられた石窓い炉で、床面を50×



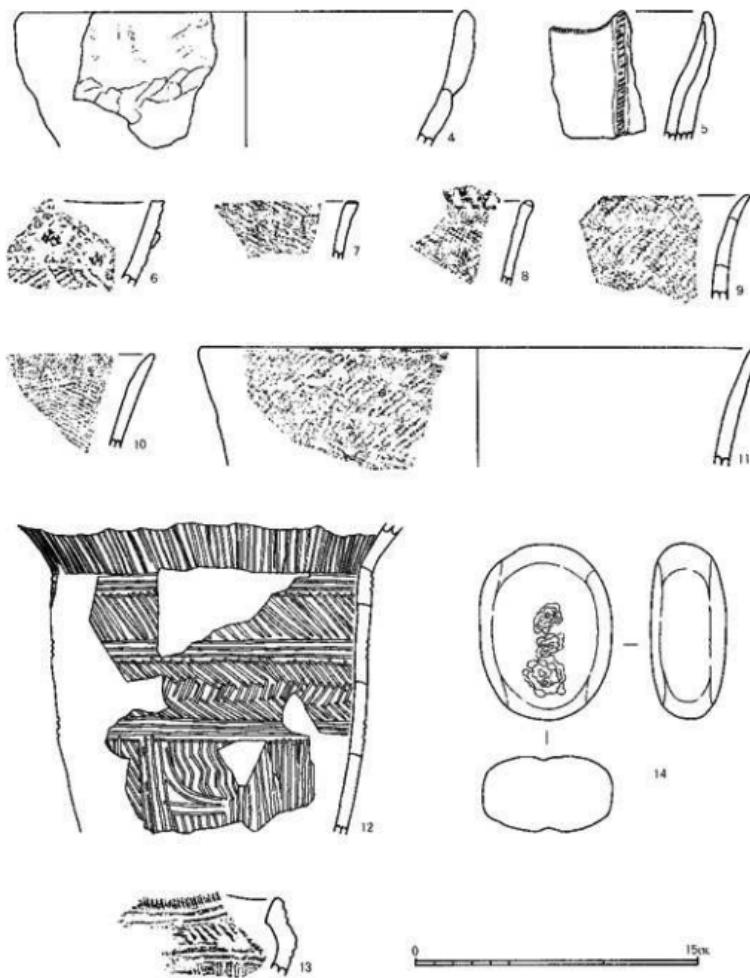
第5図 1号住居址炉実測図
(1/30)

40cm、深さ30cmの楕円鉢状に掘り込み、内間に10~20cmの扁平な自然石を6個使い南側の1個は扁平面を上に向ける。その他は立てて配置してある。僅かな焼上しか見られず炉もさほど焼成を受けていないことから炉の使用期間は短かかったと思われる。床面はほぼ平坦で、若干南側に傾斜し部分的に硬く縮まっていた。壁は外側に向か斜めに立ち上がり、残存壁高は25~40cmを測る。柱穴は24基検出されたが、形や深さは様々で七柱穴は明らかではない。又、炉の南側に石窓いが一部を切られた土壤がある。

遺物 (第6・7図) 遺物は住居址の覆土中より出土している。1~3は總て黒曜石製で1は使用痕のある剥片、2・3は石鏃である。4は鉢形土器口縁部で色調は白褐色を呈し、胎土中に多量の纖維痕を残す。5は波状口縁をもつ深鉢口縁部である。明灰褐色を呈し、胎土に金雲母を含み焼成はやや軟質である。波頂部より重紐が貼りつけられ、口唇部と重紐にかかるい刻み目が施される。6は胎土に纖維質や小石を含む深鉢口縁部で波状口縁となる。外面には竹管文と縦文を施し瘤文が貼付され、内面は丁寧に磨かれている。7~11は地文を縦文とした器厚の薄い深鉢形土器口縁部で、全体に指圧痕が残り内面は横位のナデが簡略に施される。胎土は8を除いて金雲母が含まれ、焼成は良好である。7は口唇部の一部にかかるい刻み目が、8は断面コの字状の強い刻み目が廻る。12は深鉢洞部で明灰褐色を呈し、胎土には多くの砂粒と小石を含みやや粗い。胴部には半截竹管を用いて横位の文様帯が作られ内部に集合沈線が充填される。又、頸部から上は外反し縦位の沈線を施す。13は波状口縁を呈した深鉢形土器口縁部で、胎土に砂粒、金雲母を含む。口唇部は半截竹管による連続爪形文が施され、以下は平行沈線で文様構成される。11は多孔質の安山岩製の磨石で表面(尖削面)に3ヶ所、裏面に2ヶ所の凹を有す。



第6図 1号住居址出土石器実測図 (2/3)



第7図 1号住居址出土上器・石器実測図 (1/3)

以上の出土器の中では、4は前期初頭の花積下層式に、5・6は前期前半の中越式、関山式にそれぞれ比定できる。7～11は前期終末から中期初頭の所産であろう。12・13は中期初頭の丸領ヶ台式に比定される。

III 埋 窒

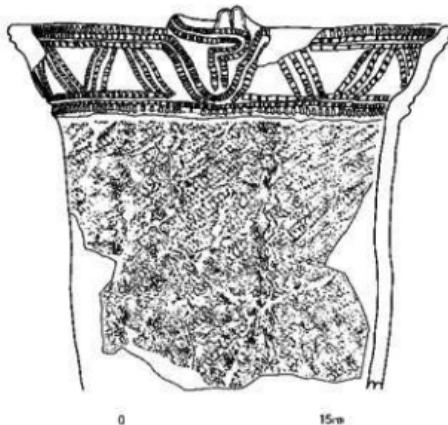
1号埋甕

遺構(第8図) B3グリッドに位置する。表土除去作業中に発見された遺構だが、上部を耕作による削平で、北側の半分を1号溝により壊されている。推定平面プランは半径90cm前後の円形と思われ、確認面からの深さは12cmを測る。遺構内は平らな面を上にした石が2個置かれ南隅に土器が横倒しの状態で地上側の半分と底部を欠損し検出された。住居址に関係する可能性もあり周辺を精査したが遺構は全く確認されず、単独の埋甕(埋設土器)として扱うこととした。

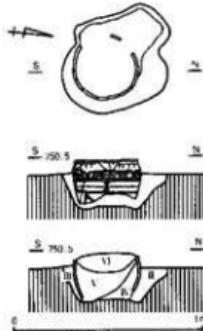


第8図 1号埋甕実測図 (1/30)

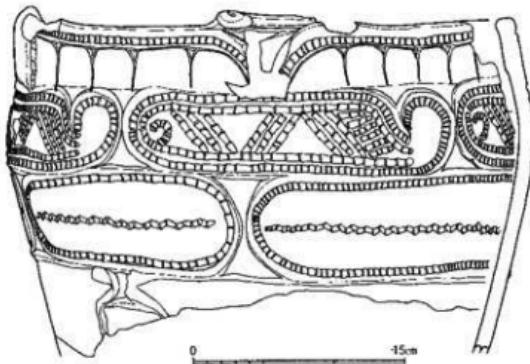
遺物(第9図) 口縁部に粘土紐の貼り付けによる突起を有する深鉢である。色調は赤褐色を呈し、胎上には小砂粒を多く含む。口縁部と頸部の隆帯に継ぎの刻みを施らせ、その間に斜位の角押文列で三角形の構図が創られ、頸部以下は結節繩文が施される。縄文時代中期中葉の新道式に比定される。



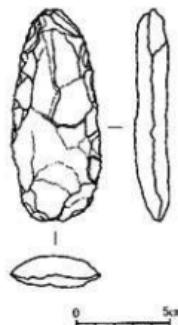
第9図 1号埋甕土器実測図 (1/4)



第10図 2号埋甕実測図 (1/30)



第11図 2号埋甕上器実測図 (1/4)



第12図 2号埋甕内出土
石器実測図 (1/3)

2号埋甕

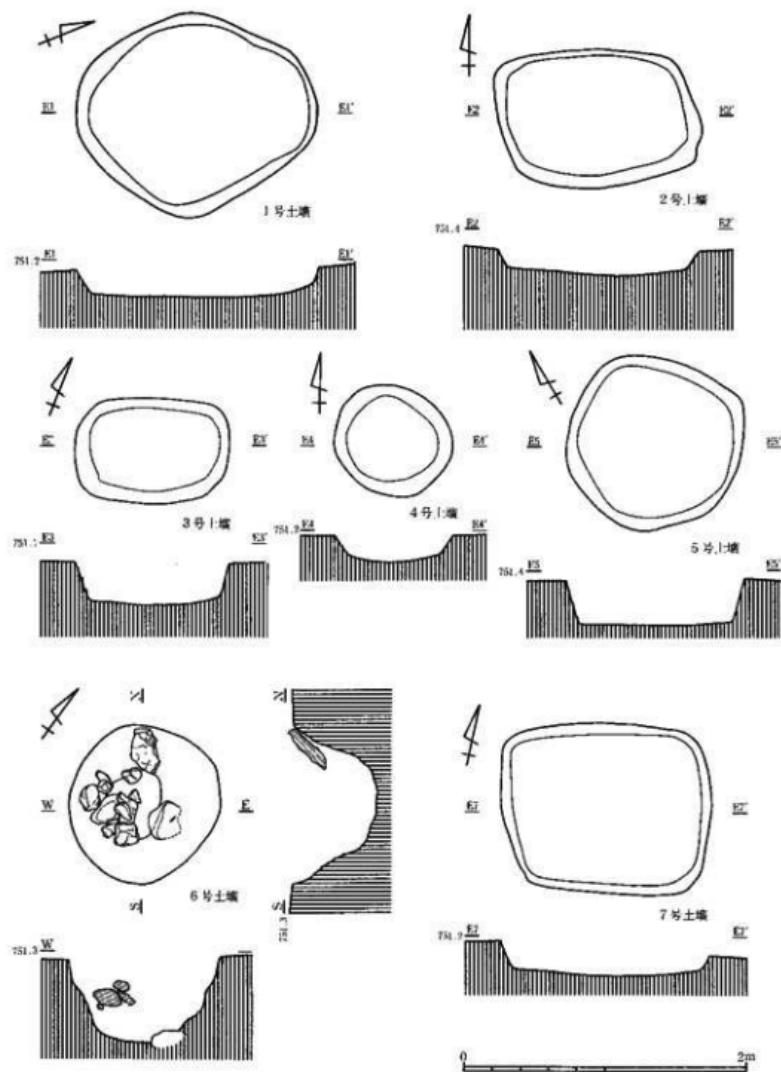
遺構 (第10図) C 4グリッドに位置する。50cm×65cmの2ヶ所に括れがある不整梢円形を呈し、残存深さ18cmを測る。胴部下半を欠損する土器が正位で埋設され、内部より打製石斧1点が出土した。土器内の土には焼土粒子が認められ、本遺構が埋甕であったと考えられるが周囲から住居址に関連する遺構は検出されず、単独の屋外炉としてとらえた。

遺物 (第11・12図) 第11図が炉体土器で、口径35cmを測り、胴部から口縁にかけ緩やかに内湾する深鉢形土器である。色調は暗褐色を呈し、胎上に砂粒と金雲母を含む。口縁部の4ヶ所に突起を持ち、胴部の横位文様帶は大きく4段に分けることができる。初段は口縁部と口縁部突起から下に延びる陸帯に沿う角押文と、Y字状文の沈刻により構成される。2段目は陸帯による片巻梢円区画の中を角押文列が施され、3段目は梢円区画帶内にジグザグ文が施される。最終段は上段から続く陸帯をX字状に変え重下させる。縄文時代中期中葉の格沢式に比定できよう。第12図は土器内部より出土した短冊形の打製石斧で、ホルンフェルス製だが表面は風化し鳥肌状にざら付いている。

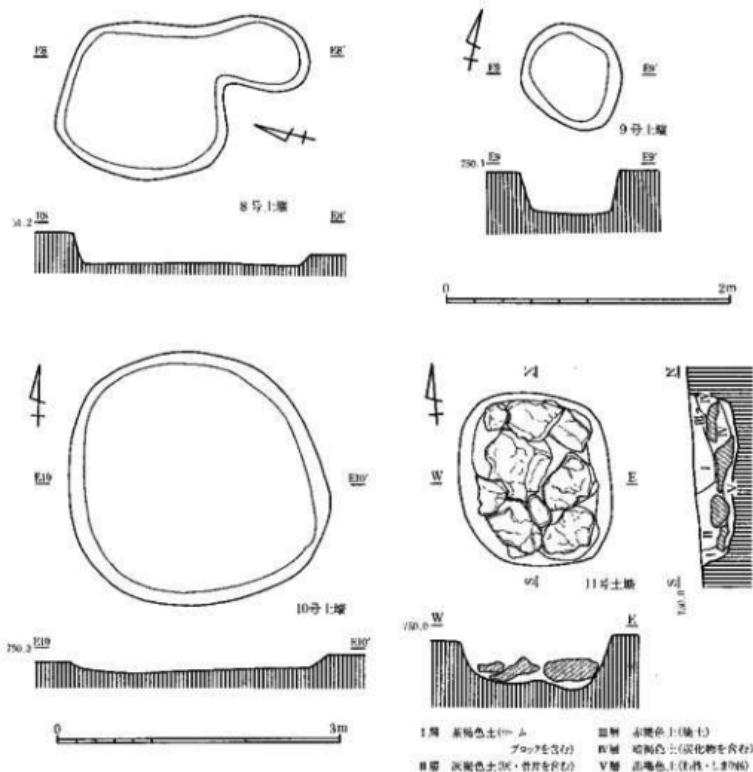
IV 土 壤

1号土壤

遺構 (第13図) D 2グリッドに位置する。170cm×145cmの方円形を呈し、深さは20cmを測る。覆土は黒褐色土で北西壁近くの底面直上より石錐1点が出土している。



第13図 1・2・3・4・5・6・7号土壤実測図 (1/40)



第14図 8・9・10・11号七塚実測図 (1/40・10号十塚1/60)

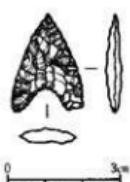
遺物 (第15図) 黒曜石製の無茎鐵ではば完形品である。

2号土壙

遺構 (第13図) D 1 グリッドに位置する。140cm×100cmの隅丸長方形を呈し、深さ18cmを測る。覆土は黒褐色土上の単層で、土壤内より遺物の出土はない。

3号土壙

遺構 (第13図) D 2 グリッドに位置する。110cm×75cmの隅丸長方形を呈し、深さ30cmを測る。覆土は縮まりの弱い黒色上で、遺物は確認されていない。

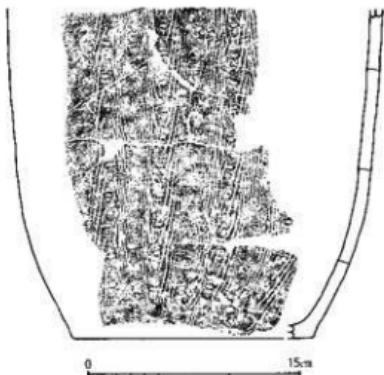


第15図
1号上塚出土
石器実測図
(2/3)

4号土壙

遺構(第13図) C2グリッドに位置し直径80cmの円形を呈す。深さ18cmを測り、覆土は暗褐色土の単層で小礫が混入していた。遺物は土器片が土壙覆土の上部から出土している。

遺物(第16図) 胸部上半を欠く平底の深鉢形土器である。色調は明褐色を呈し、胎土には多量の砂粒を含むが精製されていない。外面に本目状撚糸文が施文され、縄文時代前期末葉～中期前葉に比定できる。



第16図 4号土壙出土土器実測図(1/4)

5号土壙

遺構(第13図) B2グリッドに位置する。直径120cmの円形を呈し、深さ32cmを測る。覆土は2層に分れるが、両層ともローム粒子と小礫を含んでいた。出土遺物は無い。

6号土壙

遺構(第13図) B2グリッドに位置する集石土壙である。直径110cmの円形を呈し、深さ60cmを測る。覆土は黄褐色土上でロームブロックを含み、締まりがなく人為的に埋められたと考えられる。内部の石も形や大きさに規格性がなく、下部ローム層中の礫と同質であることから土壙を掘った際に出てきた石を集めたものであろう。遺物は縄文土器の小片を数点出土した。

7号土壙

遺構(第13図) C2グリッドに位置し、150cm×120cmの長方形を呈す。深さ20cmを測り、覆土は黒褐色土上で遺物の出土は無い。

8号土壙

遺構(第14図) C2グリッドに位置する。南北170cm×東西110cmの不整形な土壙で、深さは底部が水平に掘られ、地形が南へ傾斜しているため北壁で20cm、南壁で8cmを測る。覆土は締まりのある暗褐色土で、遺物は縄文土器の小片が出土している。

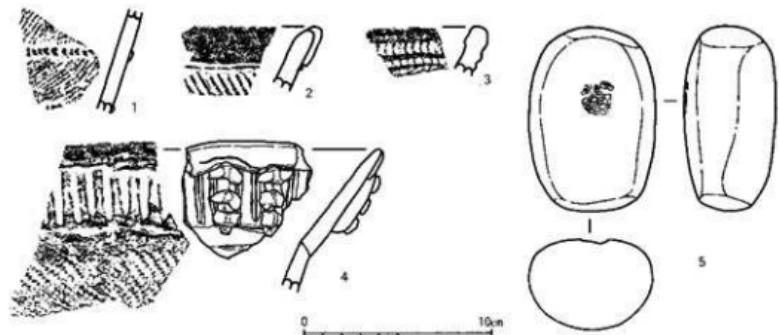
9号土壙

遺構(第14図) C4グリッドに位置し、直径70cm、深さ30cmを測り円形を呈す。覆土は暗褐色土を主体とし3層に分かれるが、遺物の出土は無い。

10号土壙

遺構(第14図) B4・5グリッドに位置する。直径270cmの大きな円形を呈し、深さ14cmを測る。なだらかに立ち上がる壁の状態から、当初の掘り込みもさほど深くなかったと思われる。遺構の時期や性格は不明である。覆土は暗褐色土で、縄文土器と磨石が散在した。

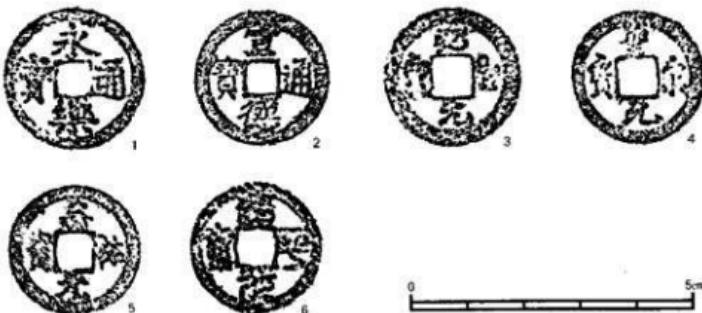
遺物(第17図) 1は縄文地に結節浮線文が使われ、2は半截竹管による沈線が、3は爪形文、角押文がそれぞれ施される。4は折り返し口縁の深鉢形土器で、色調は黒褐色を呈す。口縁下に縱位の沈線と粘土紐による装飾が施され、以下を縄文が覆う。5は輝石安山岩製の磨石で表面に1ヶ所の凹があり、各面とも明瞭な磨耗が見られる。以上1~4の土器は前期末から中期中葉に位置付けられる。



第17図 10号土壙出土土器・石器実測図(1/3)

11号土壙

遺構(第14図) C5グリッドに位置する中世の上塙墓である。南北120cm、東西105cmの隅丸長方形を呈し、深さ30cm程を測る。内部は20~50cm位の石が組合せて敷きつめられていて、



第18図 11号土壙出土古錢拓影(1/1)

石の表面は赤く焼けている。覆上は5層に分かれ、土中より焼土、炭化材片、灰の他に骨片が検出された。本土境内で火葬されそのまま埋葬されたのであろう。遺物は六道錢とする波出銭6枚がまとめて出土した。

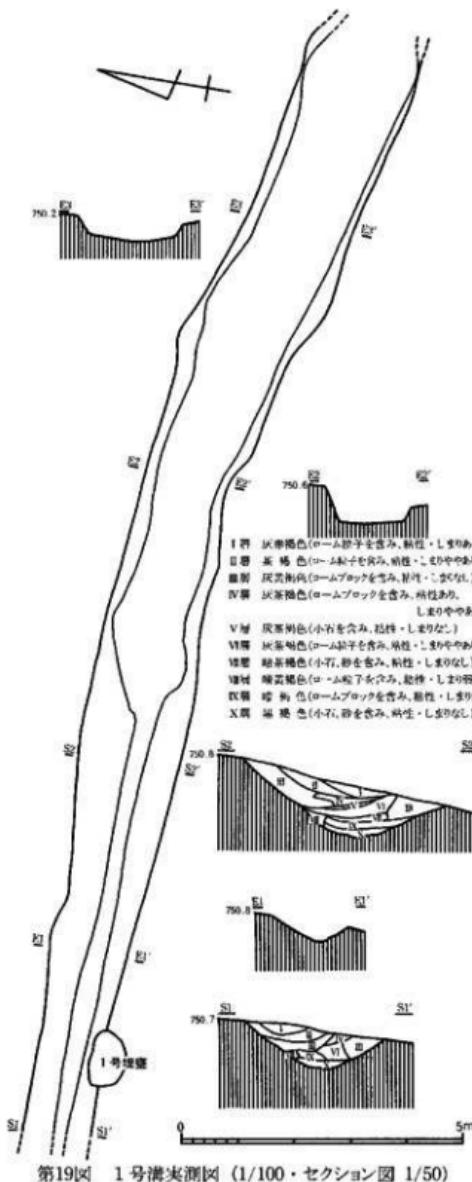
遺物(第18図)

1. 永樂通寶(初鋳年1408)
2. 宣德通寶(1433)
3. 紹聖元寶(1094)
4. 熙宋元寶(1101)
5. 嘉祐元寶(1057)
6. 治平元寶(1064)

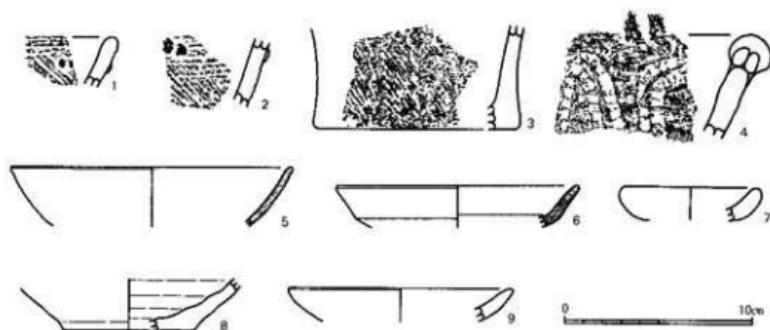
V 溝

1号溝

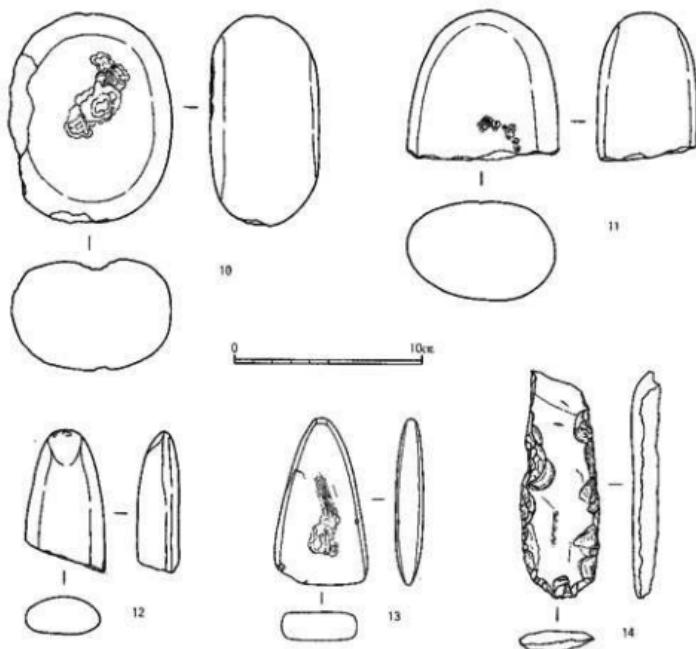
遺構(第19図) 1号住居址の南に位置し、西から東へと向かい、内約20mを調査した。両端は更に調査区外へと延びる。西端は幅1.2m、深さ30cmを測り、断面はU字形を呈している。8m程進んだ所で底部は急激に広がり平坦となり、東端は幅2m、深さ40cmを測る。覆上は10層に分かれるが、下層には小石や砂が含まれ、底部の比高差が両端で約60cm程あり緩やかに東へと傾斜することから、本址は水路として機能していたと考えられる。遺物は覆土中より縄文土器、石器、陶磁器、土師質土器などが出土している。



第19図 1号溝実測図(1/100・セクション図 1/50)



第20図 1号溝出土遺物実測図 (1/3)



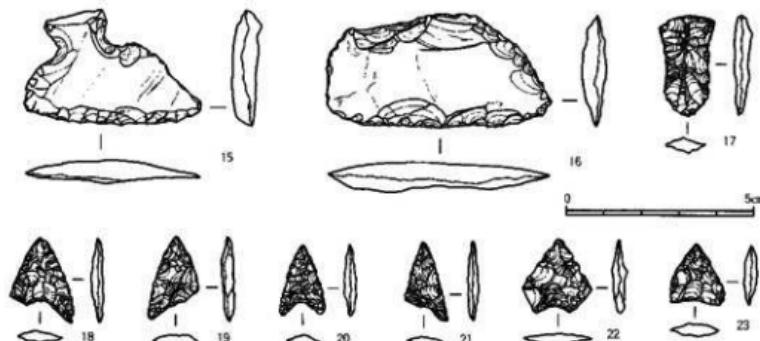
第21図 1号溝出土石器実測図 (1/3・13は1/2)

遺物 (第20図) 1・2は結節浮線文と集合沈線文が施され、ボタン状突起が貼付される。3は結節細文を施す深鉢形土器の底部である。4は角押文を主文とし、口縁部に飾り突起

を有する深鉢形土器である。5は灰釉陶器皿。6は青磁の皿で灰緑色を呈すが、釉厚は薄い。7は赤褐色をした手捏ねの小皿である。8・9は土師質土器皿で胎土に多量の金雲母を含む。8は底部回転糸切り。1・2は縄文時代前期の諸磯C式に、3は十三倍式に比定される。4は中期中葉の新道式に比定できる。5は平安時代、6～9は中世に位置する。

(第21図) 10は磨石で石材は多孔質の安山岩。表面に不整形な深い凹が、裏面に浅い凹が2ヶ所に見られる。11は緻密な輝石安山岩製の磨石。12は乳棒状磨製石斧の基部で石材は緑泥片岩。13は小型定角式磨製石斧で粘板岩製。磨製時の細かい擦痕が各稜線に対して直交し見られる。又、図示した擦痕は二次的な擦痕と思われる。14は短冊形の打製石斧で石材は質岩。

(第22図) 15は泥岩、16はホルンフェルス製の石匙。17は図面上で上部を欠損し矛先状を呈す。黒曜石製で外周に細かな調整が入るが用途は不明である。18～23は黒曜石製の無茎錐で図示した他に黒曜石製で6点、チャート製で1点の石錐片が出土している。



第22図 1号溝出土石匙・石錐実測図 (2/3)

VI 遺構外出土遺物

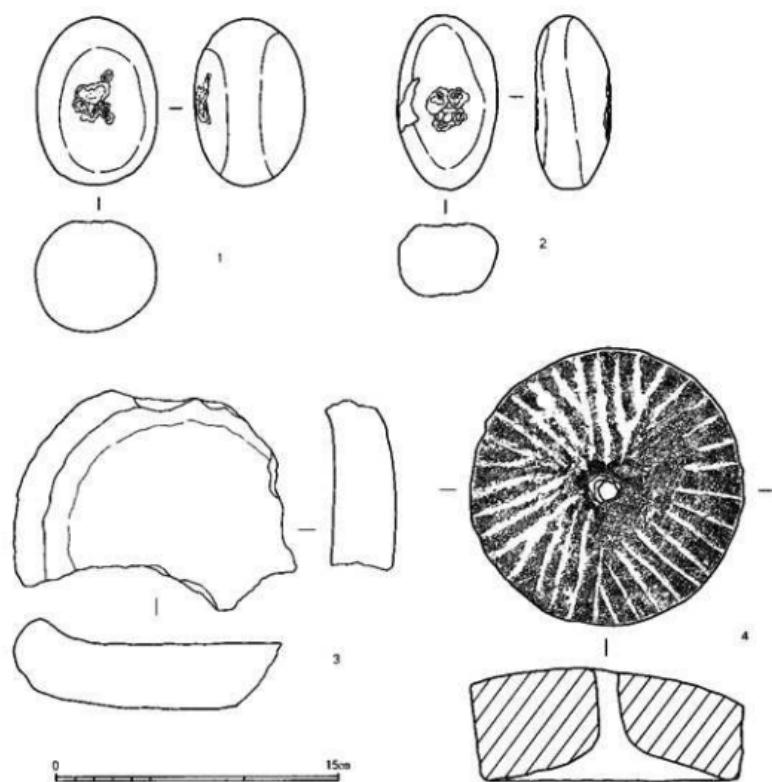
土 器 (第23図) 1はC2グリッドより出土した深鉢形土器口縁部。外面に沈線文が施される。2はA1グリッド。胴部片で結節浮線文が施文される。1・2は縄文時代前期の諸磯式に比定される。3はA2グリッド。半截竹管による集合沈線文が、4はA2グリッド。結節網文が施され、五額ヶ台式に比定される。5はA1グリッド。中世期の上部質の小皿である。

石 器 (第24図) 1はC2グリッド、2はC3グリッドより出土した磨石である。1は輝石安山岩製で、上面に不整形な凹を持つ。2は多孔質の輝石安山岩製で、上下面に浅い凹があり上面は平坦に磨耗している。3はC2グリッド出土の安山岩製の石皿だが、全体にざらつき使用痕(擦痕)は認められない。4は表土除去中に出土した下臼で、砂岩系の石が使われ直徑29cm

を測る。磨耗が激しく、特に擦り減った部分には、当初の分画とは違う放射状の溝が再刻される。

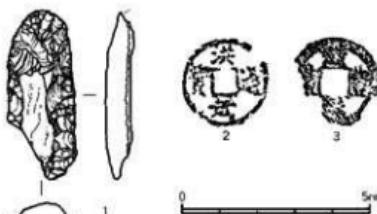


第23図 遺構外出土土器実測図 (1/3)



第24図 遺構外出土石器実測図 (1/3・石臼 1/6)

その他（第25図） 1はC2グリッド。
赤色チャート製で石匙の類であろう。2、
3は表土中より出土した古銭で、2は洪
武通寶（1368）、3は元豐通寶（1078）



第25図 遺構外出土石匙・古銭（2/3）

I 編文時代

本調査により得られた縄文時代の遺構は住居址1軒と、埋甕2基である。

住居址の時期決定に重要な出土土器は、前期初頭の花穂下層式から中期初頭の五領ヶ台式までと時間的に幅があるが大半は覆土中の上層より確認されている。しかし、第7図の遺物番号12の深鉢は床面近くに散在していた破片を復元したもので、住居址に伴う土器と思われる。又前期の地床がから中期の大型の石圓い炉へと移行する過程に於いて、石圓い炉の初期段階とも言える小型の石圓い炉が存在する事からも、住居址の時期を縄文時代の中前期初頭に求めたい。

埋甕は2基とも単独としたが、勝沢、新道期における住居址と屋外の埋甕（埋設土器）の関係が今後の課題となるであろう。

土塙では4号と10号から遺物が出土している。ただ遺物と土塙が造られた時期が必ずしも一致するとは言えず、むしろ混入した可能性の方が高い。そんな中で、注目すべき遺物もある。4号土塙出土の深鉢は外面に木目状撚糸文を施しており、同類の土器は富山県の朝日貝塚や石川県の真庭遺跡で確認されている。十三菩提式朝日下層系に比定されるが、外面胴部の木目状撚糸文は前期末の北陸を中心に用いられ、五領ヶ台式の一部や中期前葉の新保・新崎式にも見れる。口縁部付近が欠損している本土器が十三菩提式とは一概に言えないが、何れにしても本土器の川上は前期末から中期初頭にかけて北陸系文化と人的、物的交流が直接、間接的に行なわれていたと推察される。

II 中世

中世の遺構として11号土塙が在る。盛土等の上部構造は削平により不明だが、配石された主部は残存状態が良い。前記の通り火葬墓（茶毘臺）だが、その年代は副葬品中の宣徳通寶の初鋤年から15世紀後半以降で寛永通寶が回収される17世紀の中頃迄に造られたと考えられる。

中世の葬制については火葬が一般的で、地域差はあるが骨蔵器が出土する例も確認されている。しかし、県内では中世墳墓が調査された例は少なくその実態をつかめていないのが実状である。資料の蓄積を待ち墳墓の形態による編年的位置付けについて再考したい。

その他に1号溝より中世期の青磁や上質土器が検出されている。大半は流れ込みに因るも

での溝跡とは直接関係ないが、調査区周辺に中世の遺構が存在したのは確かである。

III 緒 び

以上、特井遺跡の調査結果に基づいて若干の考察を加え遺構、遺物の検討をしてまいりました。不十分な部分もありますが、一資料として今後の調査研究の参考となれば幸いです。

最後に、この度の発掘調査及び報告書作成に御協力頂いた皆様に末筆ながら記して御礼申し上げます。

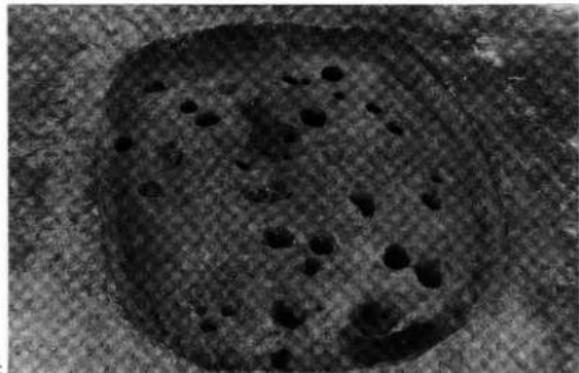
【引用・参考文献】

- 山梨県教育委員会 1979 『山梨県遺跡地名表』
1986 『山梨県の中世城館跡』
1987 『糸迎堂 I・II』
1987 『寺所遺跡』
高根町 1980 『高根町誌』 「上巻 第四編 町の歴史」
高根町教育委員会 1987 『町内遺跡分布調査』
1987 『西原・当町遺跡』
長野県教育委員会 1982 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—原村 その5』
岡谷市教育委員会 1986 『梨久保遺跡』 「第5次～第11次発掘調査報告書」
芹沢長介・坪井清足 監修 1981 『縄文土器大成』 講談社
小林達雄 編 1988 『縄文土器大觀』 小学館
中村龍雄 編 1980 『中部山地 縄文土器集成』
網野善彦 他 1984 『歴史手帳』 「14巻11号 特集*中世墳墓を考える」 名著出版
石田茂作 他 1984 『仏教考古学講座』 「第7巻 墳墓」 雄山閣出版
江坂輝彌 他 1983 『日本考古学小辞典』 ニューサイエンス社
鈴木道之助 1981 『石器の基礎知識III 縄文』 柏書房

図 版



图版
2



1号住居址



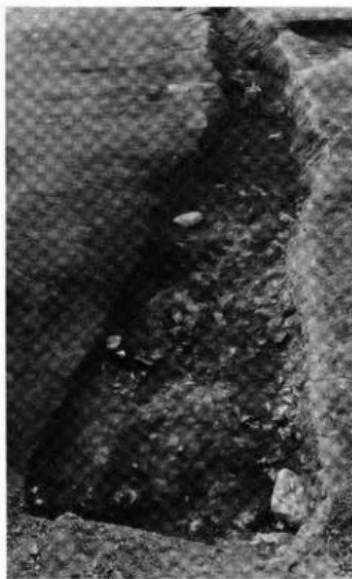
1号住居址炉



1号埋壳

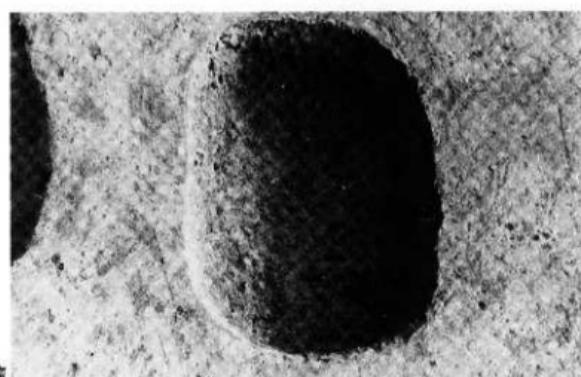
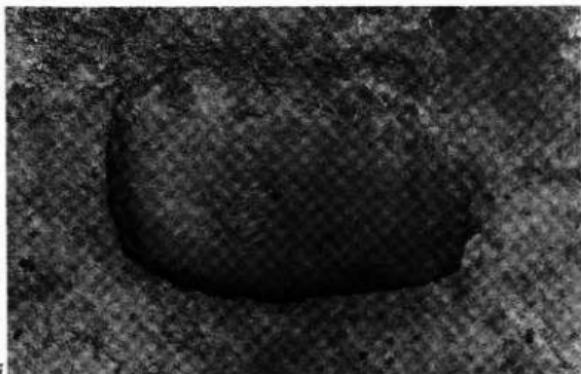


1号溝
(西より)

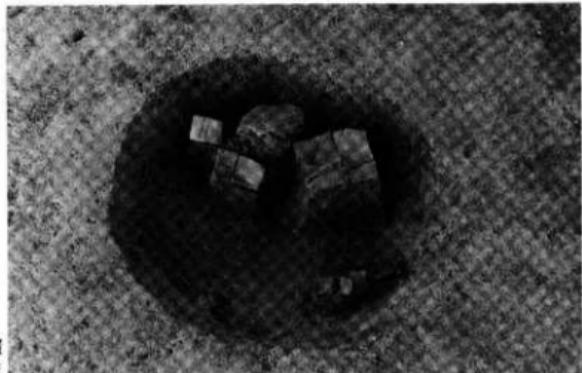


1号溝
(東より)

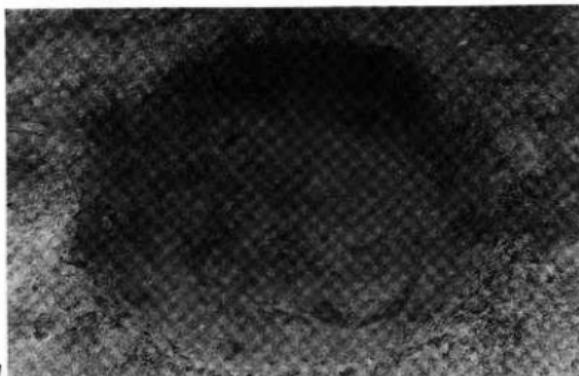
圖版 4



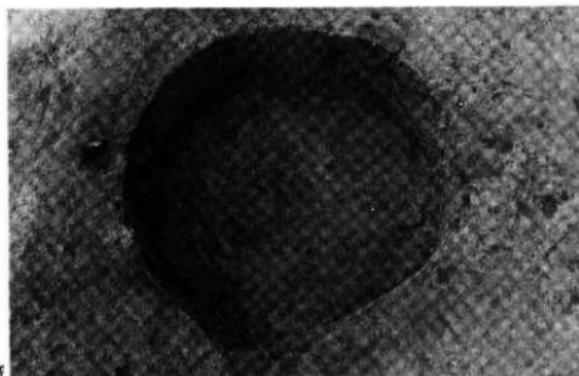
圖版
5



4号土壤
土器出土状况

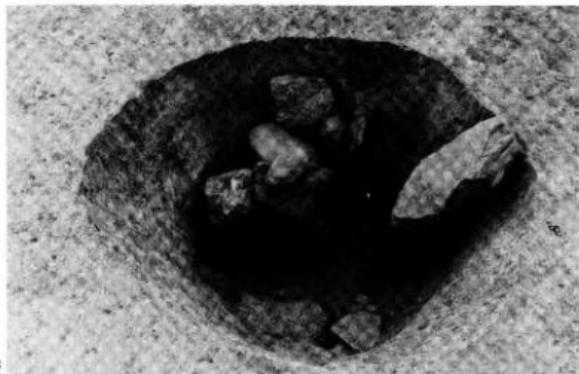


4号土壤



5号土壤

图版 6



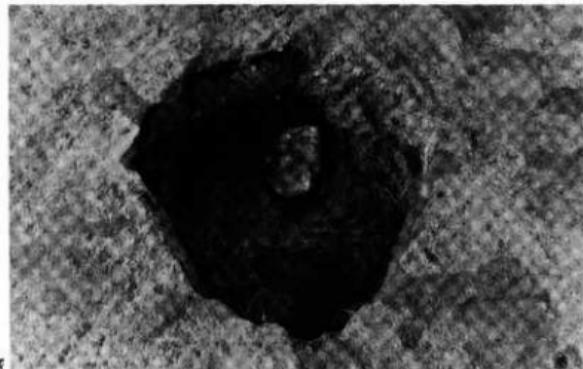
6号土壤



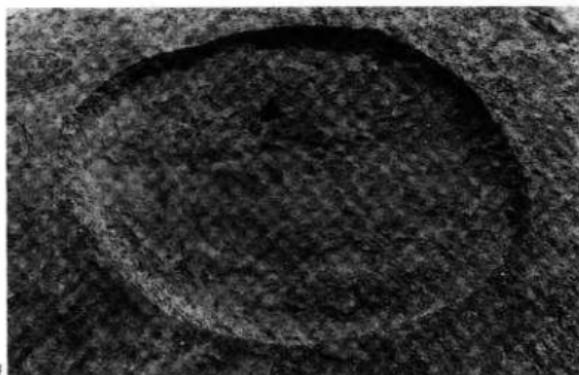
7号土壤



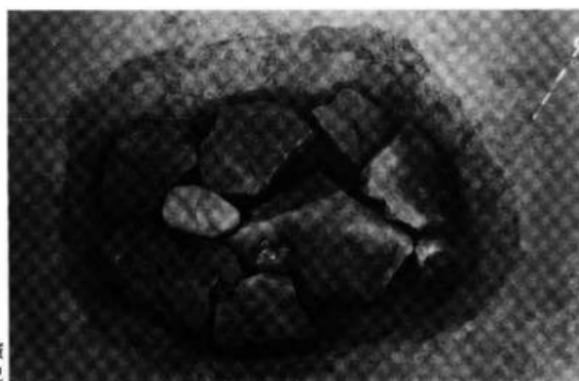
8号土壤



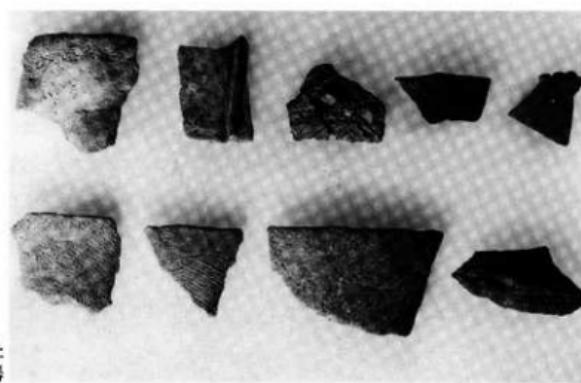
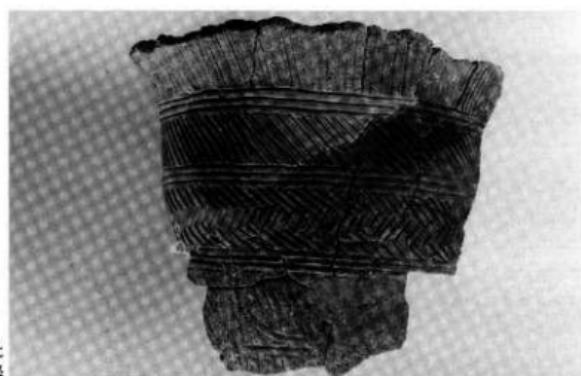
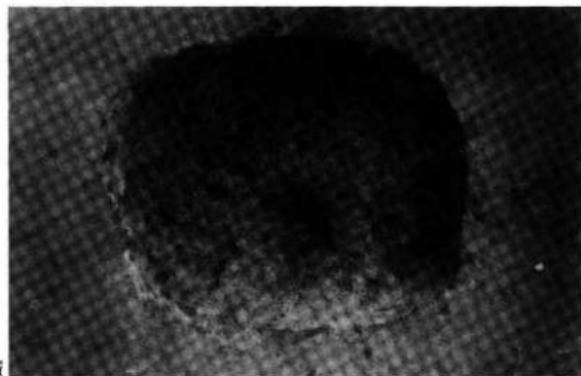
9号土壤



10号土壤

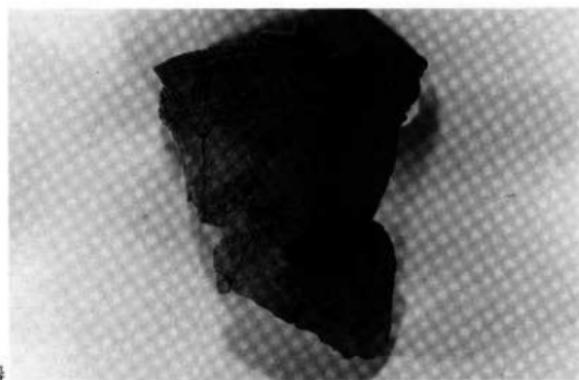


11号土壤
配石状况

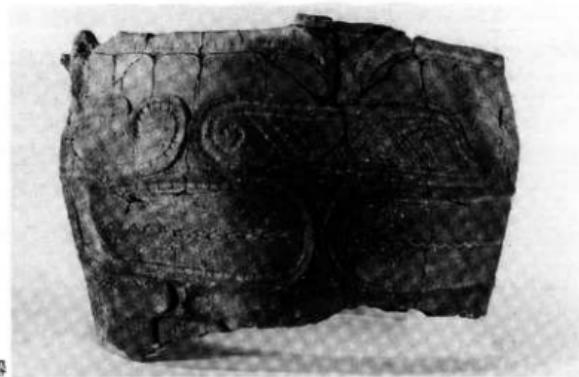




1号住居址
出土石器



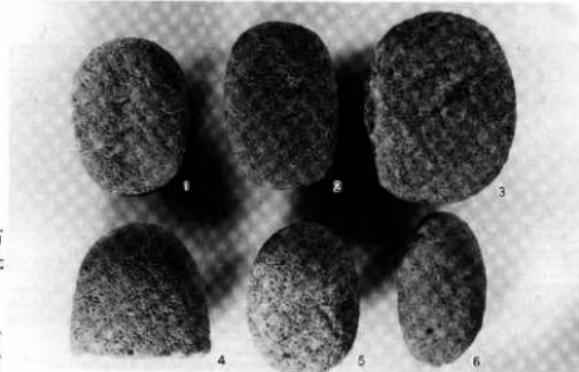
1号埋甕土器



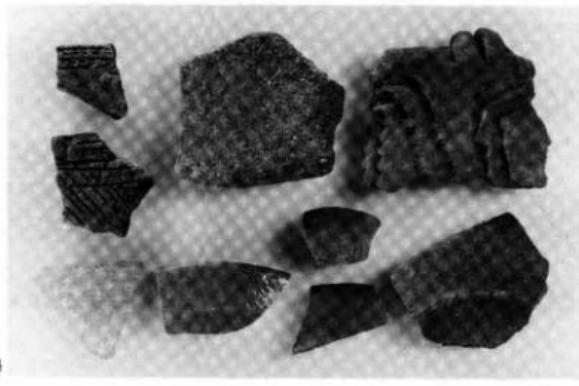
2号埋甕土器



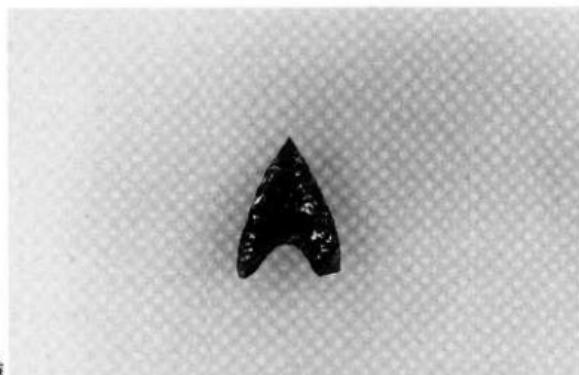
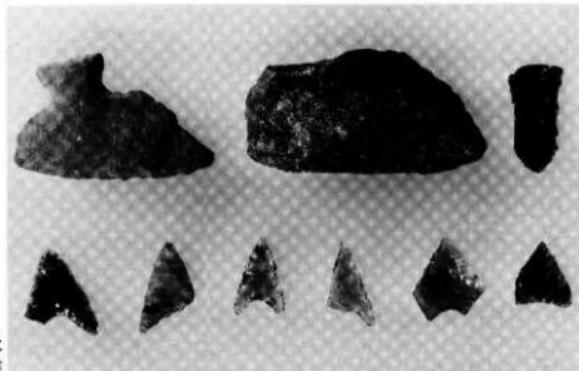
打製・磨製石斧
1. 2号埋甕内
2~4. 1号溝



磨石・凹石
1. 1号住居址
2. 10号土壤
3. 4. 1号溝
5. C 2グリッド
6. C 3グリッド



1号溝出土土器

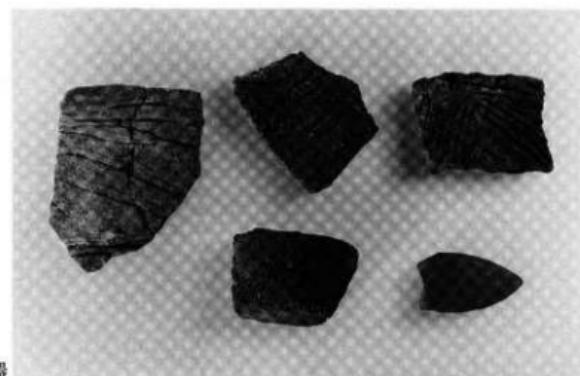




10号土壤出土土器

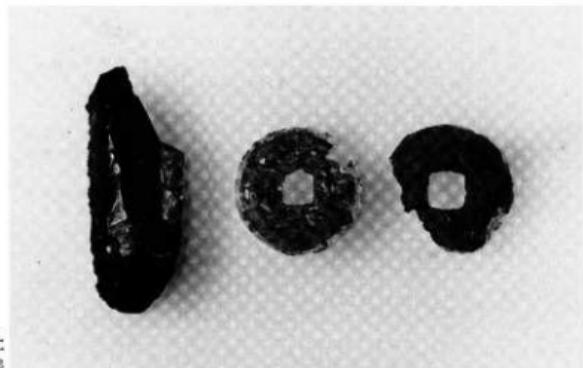


11号土壤出土古钱

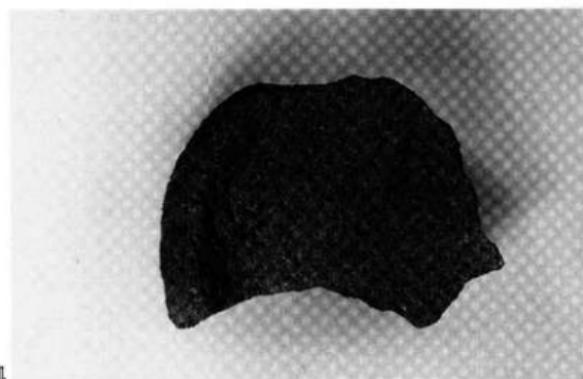


遗构外出土土器

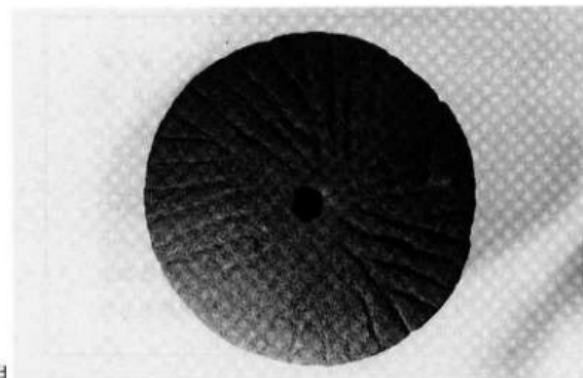
圖版
13



遺構外出土
石匙・古錢



遺構外出土石皿



遺構外出土石臼

高根町埋蔵文化財 第7集
平成5年3月25日 印刷
平成5年3月31日 発行

持井遺跡

発行所 高根町教育委員会
印刷所 峡北印刷株式会社

